



## 失敗のススメ

公益財団法人日本植物調節剤研究協会  
常務理事  
村岡 哲郎

最近、スマートフォンを買い替えた。更新時の設定作業が煩わしく感じられてなかなか踏み切れなかったが、先日、不注意で駐車場のアスファルトにスマホを落とし、画面を強く打ちつけて割ってしまったため、やむなく交換することとなった。しかし、いざ新しい機種に変えてみると、再設定のサポート機能により、使っていたアプリも簡単に復元できた。通信速度は格段に速くなり、アプリの動作も非常にスムーズ。さらに料金プランを見直したおかげで、月々の支払いも以前より安くなった。まさに「怪我の功名」と言える。

スマートフォンといえば、子どもの頃に憧れていたウルトラ警備隊の腕時計型無線電話を思い出す。当時は夢物語だったそれが、いまや世界中の人々がスマホを手にし、会話だけでなく文字や画像のやり取り、瞬時の情報検索、さらにはナビゲーションまで可能になっている。まさに隔世の感がある。

これは農業の世界にも当てはまる。たとえば水稲栽培を見ても、今から80年ほど前までは、田んぼの耕起や代かきは牛馬や人の手で行われ、一部の田に苗代を作って苗を育て、家族や親戚総出で手植えをし、稲が育つまでの数十日間、ひたすら雑草を取り続けていた。それが現在では、トラクターで短時間に耕起・代かきができ、ハウス内で育てた苗を田植機で植え付け、夫婦二人でも田植えが完了する。さらに、水を張った田に除草剤（一発処理剤）を散布し、適切な水管理をするだけで除草まで行えるようになった。

除草剤の使用方法も進化している。戦後まもなく導入された2,4-Dは、水に溶かして重い散布器を背負い、ぬかるむ田を歩き回って散布する必要があった。その後、日本独自の水田用粒剤が開発され、手まきや手回し式散粒器、動力式散布機による散布が主流となった。粒剤の標準散布量は長らく10アールあたり3～4kgだったが、1990年前後からは製造・流通の効率化、現場での作業性向上を目的に、植調協会の主導で「1kg粒剤」への移行が進められた。加えて、ジャンボ剤（10アールあたり10～20個の剤を手投げで散布する方式）の開発も進められ、現在ではその普及が進んでいる。さらに、その製剤技術（拡散性技術）を活かした少量拡散型粒

剤のドローン散布も行われるようになってきている。

もっとも、新しい技術の開発や普及には、必ず失敗がつきまとう。ジャンボ剤の開発初期には、有効成分の拡散不足で投下地点周辺の稲が枯れ、離れた場所には雑草がたくさん残るといった事例が多発した。しかし、農業メーカーの研究・開発部門による度重なる改良により、現在ではそうした事例が現場で見られることはほとんど無くなっている。

最近の若者、いわゆるZ世代には、「失敗を恐れて挑戦しない」傾向があるとされる。だが、失敗もまた貴重な経験であり、恐れずに挑戦してこそ得られるものがある。除草剤の薬効・薬害試験においても、うまくいかなかった（想定外の結果が出た）事例からは、薬剤の効果を最大限に発揮しつつ薬害を避けるための貴重な知見が得られることが多い。むしろ、最初から順調に進む試験ばかりでは、現場での薬害発生や効果不足となるリスクを見逃してしまう可能性すらある。開発者としては、世の中に技術を送り出す前に、あらゆるリスクを把握し、その対処方法を準備しておく必要がある。そういう意味でも、「失敗」は非常に重要なのだ。

ここで、我が郷土の偉人・大隈重信の言葉を紹介したい。「幾多の失敗を重ねたが、しかし恐縮はせぬ。失敗はわが師なり、失敗はわが大なる進歩の一部なり。」「諸君は必ず失敗する。成功があるかもしれませぬけど、成功より失敗が多い。失敗に落胆なざるな。失敗に打ち勝たねばならぬ。」

また、我が母校の元学長である江崎玲於奈氏はこう述べている。「日本の社会全体において、新しいことに挑戦する探求心や創造性を発揮できる環境が十分でないようにも感じる。トライアル&エラーや創造力による間違い、創造力を発揮することによるネガティブな結果をある程度、社会が認めることも必要かもしれません。」

将来を担う若者たちが、失敗を恐れず、熱意を持って挑戦していく姿勢に期待したい。